

追悼 鈴木直義先生



ありし日の鈴木直義先生

鈴木直義先生が、平成21年2月11日に77歳の生涯を終えられました。昨年後半に体調を崩され3ヶ月の入院加療中でありました。お亡くなりになる直前まで意識もはっきりとされ、原虫病研究の動向や大学の行く末を案じられていたそうです。最期は、ご家族に看取られ、穏やかな旅立ちであったとお聞きしました。

先生は、昭和6年に北海道に生まれ、帯広畜産大学獣医学科を卒業した後、東京大学農学部を皮切りに研究者或は大学人としての生活がスタートしました。昭和41年に母校に講師として戻られ、翌年に助教授、昭和48年に教授、平成2年から原虫病分子免疫研究センター長に就任されました。また、平成元年から平成4年まで東京大学農学部教授（併任）、平成2年から平成7年まで岐阜大学大学院連合獣医学研究科教授（併任）を勤められました。帯広畜産大学の定年は63歳ですので、平成7年3月に原虫病分子免疫研究センター長を最後の職として、帯広を一旦は離れられました。

東京大学在職の間は、血清透析性カルシウムと寄生虫感染症を含む諸疾病との関連性についての病態生理学及び臨床病理学の分野で研究を進められました。帯広畜産大学の獣医学科生理学講座に赴任後、アレキサンダー・フォン・フンボルト財団の支援を受けてドイツに留学されたことが、終生に渡って原虫病と関る契機となりました。

ヨーロッパにおける原虫病研究の中心的機関であるドイツ連邦共和国ボン大学医学部の寄生虫・原虫病研究所において、先生はトキソプラズマ原虫を含む諸種原虫感染宿主の病態生理学的研究を進められました。研究所の所長はピーカルスキー先生で、後に世界寄生虫学者連盟会長に就任され、昭和58年には我が国から勲三等旭日中授章を受章されています。

鈴木先生の主な研究テーマは、血液学領域を基盤にした細胞間相互作用を解析するための免疫学的手法、特に原虫感染に対する細胞性免疫応答を解析するための手法を開発することでした。感作リンパ球を解析し、未解決であった人獣共通感染原虫であるトキソプラズマ感染症の宿主・寄生体免疫応答を実験的に解明されました。T細胞学、インターフェロンの役割或はサイトカイン・カスケードの考え方の基礎となるもので、その成果は広く国内外の学術誌に引用され、国際的に高く評価されています。

また、先生は、学術の国際交流と協力において極めて功績大なるものがあります。ピーカルスキー教授はじめ、ドイツ人研究者との学術交流をもとにし、日本の原虫学者の協力を得て日独原虫病協会の設立に携わり、発会以来、理事或は会長を続けられ、ドイツ側との折衝の窓口として活躍されました。

鈴木先生は、上記の学術業績並びに国際学術交流の功績により、昭和58年10月にドイツ寄生虫学会名誉会員に推され、昭和62年11月にはドイツ連邦共和国功労勲章一等功労十字

章を受章されました。平成4年4月には先生の永年にわたる研究「人獣共通トキソプラズマ原虫症の病態生理学的研究」に関する学術業績に対し日本農学賞と読売農学賞を受賞されました。また、日本国政府から平成6年4月に「紫綬褒章」が授与されています。

平成7年に定年退官された後、約7年の間において、今度は研究者ではなく経営者として、平成14年1月、帯広畜産大学としては初めてとなる母校出身の学長として大学に戻られました。当時、大学は再編・統合や法人化など、百年来の大学教育改革に加えて、全国の国立大学において獣医師ライセンス教育の充実が大きな課題となっていました。実は、第34回日本原生動物学会が神戸スペースアルファで開催された折、鈴木先生から「学長への立候補を考えている。」という相談を受けました。私は、当時の学内情勢と先生のお身体のことを考え、「賛成できません。」と答えました。しばらく話をしているうちに、先生の決意は堅く翻意は無理と考え、私も覚悟を決めたのでした。学長選挙は短期決戦となりましたが、結果として、学内の構成員からは、獣医学教育を熟知し、学内の事情にも精通している鈴木先生を学長としてお願いすることになりました。折しも、1万人規模の患者を出した平成8年の腸管出血性大腸菌O157集団感染症の発生以来、多剤耐性サルモネラ感染症、口蹄疫、BSE、黄色ブドウ球菌毒素による集団食中毒、オリーブのボツリヌス毒素汚染、さらには炭疽菌によるテロ勃発など多くの感染症が社会問題となり、国民の健全な社会生活を脅かした時期でありました。これらの感染症は全て動物由来感染症であり、農畜産物を介して人に伝播する可能性が高いことから、「食の安全」への社会的関心が急速に高まっていました。鈴木先生は、公衆衛生及び危機管理の観点から、これら感染症の予防・診断・治療方法の確立に結びつく基礎研究の充実が急務であると考え、高等教育機関としての大学の責務として、畜産・獣医領域に新たに複合的な枠組みを構築し、感染症だけではなく家畜衛生全般に携わる研究者による高度な研究が行える研究組織整備と高度人材育成のための教育課程整備を行いました。

先生は、法人化の波を乗り越え、中期計画目標、年度計画とその評価をクリアされ、大学創立以来の念願であった独自の大学院博士課程設置を達成しました。日本で唯一、獣医学分野と畜産学分野が融合した学際領域である畜産衛生学博士を授与する大学院です。先生は、学長職の満期である2期6年間勤められ、平成19年12月をもって退職されました。これらの大学運営の功績が認められ、平成20年4月に「瑞宝重光章」を受章されました。

以上のように、鈴木直義先生は、教育者として、また研究者として残した足跡は、真に偉大なものがあります。人と人の繋がりを大事にし、相手を思い遣る先生であるからこそ、多くの人に慕われ、学際的な研究分野の開拓も可能であったと思います。

帯広畜産大学原虫病研究センターの壁には、「原虫病研究を通じて国際社会に学術貢献する。鈴木直義」という色紙が掲げられています。原虫をこよなく愛し、常に世界を視野にいれ、学術成果をもって社会貢献することを旨としていた先生の考えを、教え子達は必ず引き継ぐ事をお約束します。

鈴木直義先生のご冥福を心からお祈り致します。

(帯広畜産大学 長澤秀行)